



アイヌタイムズ

第44号

2008年4月7日(月) アイヌ語ペンクラブ

アイヌタイムズ第44号(2008年4月7日発行)からアイヌ語抜粋
著者: 横山裕之

ユネスコ オッタ「国際言語年」オルシペ アン

(アイヌ イタク [アイヌ語])

2007 パ 5 チュプ 16 ト タ、国際連合第 61 回総会 アン ルウェ ネ。

モシリ エピッタ 言語 ヘネ 文化 ヘネ ウウエシンナイノ オカ コロカ、ウサ ウサ アウコエラマン ヤク ピリカ、セココ 国連総会 ヤイヌ コロ、2008 パ "国際言語年" セココ レコレルウェ ネ。

2007 パ 11 チュプ タ、ユネスコ事務局 ウンサパネクル 松浦晃一郎 ニシパ 国際言語年 エク ヒ エヤイコプンテク コロ エネ ハウエアン ヒ; 「チュタリ ユネスコ (国際連合教育科学文化機関) アナクネ、ネ 国際言語年 オロウン ウサ オカイ ペ オロタ イカスヤシ カキ、イカシパオツテアシ カ キクス ネ ナ。

チュタリ アナクネ、言語 ネ マヌ プ シノ アエヤム クニ プ ネ ヒ ピリカノ チェラマン ワオカアシ ルウェ ネ。

アウタリ シネン シネン、アコロ イタク シンナイノ アン クシケライボ、ピリカノ シンナ ウウエカラパ オカ、シンナ ウレシパ オカ ルウェネ。

アコロ イタク アニ エネ ウサトイネノ オカアン ヒ クス、オヤ クル シンナイノ アン ヤツカ アラムオシマ コロ トウラノ ウウエピリカアン エアシカイ ペ ネ ルウェ ネ。

ユネスコで「国際言語年」の話がありました

(日本語)

2007年5月16日に、国際連合第61回総会がありました。

国中で言葉やら文化やらそれぞれ違って存在しますが、それぞれ(言葉や文化について)わかり合えるとよい、と国連総会は考えて、2008年を「国際言語年」と名づけたのでした。

2007年11月に、ユネスコ事務局長の松浦晃一郎氏は、国際言語年が来ることを喜びつつ次のように話しました;「私たちユネスコ(国際連合教育科学文化機関)は、この国際言語年の諸事において手助けしたり、指令を出したりするつもりですよ。

私たちは、言葉というものが本当に大切なものであるということをよく理解しています。

私たちは一人一人、持っている言葉が違っていているおかげで、きちんと違った集団が生まれ、違った暮らしが生まれます。

私たちは言葉によってこのようにめいめい違っていているので、他人が違っていてもそれを認めつつ一緒にお互いの力で幸せになれるものなのです。

シネ 言語 イェ ウタラ モヨ ヤクン、エウエン
ヒ カアン。

ネ 言語 イェ ウタラ ナア ポロンノ アン ク
ニ アカスイ ヤクン、ネ ウタラ アエピリカレ
カ キ、ウトウラ ウウエピリカアン カ キ ナン
コロ クス、イキアン アイネ、シノ ウエンクル
アナク イサム ナンコロ。

オラ、初等教育 モシリ エピッタ アピラサ ク
ニ、カムピヌイエ カ カムピヌカラ カ ピリカ プ
ネ ワ、言語 アニ ウサ オカイ ペ アイエパ
カシヌ クニ プ ネ ルウエ ネ。

HIV / エイズ、マラリア、ウサ オカ シエイエ
キ ウタラ アトウサレ クニ、ネ ウタラ コロ イ
タク アニ ウコイソイタカン ヤク エアシリ キ。
自然環境 アエプンキネ クニ、ウサ オカ モ
シリ タ オカ ウタラ ネヤ 先住民 ウタラ ネ
ヤ、ピリカレンカピ アコチャヌプ ヤク ピリカ。
クス、コロ イタク ネ ヤツカ アエヤム クニ プ
ネ ルウエ ネ。

アコロ 言語 ポロンノ アン ヤクン、アコロ 文
化 カ ポロンノ アン セコロ アン ペ アナク
ネ、カムピ カ タ アヌイパ ワ オカ。

文化の多様性に関するユネスコ世界宣言と
その行動指針 (2001 パ)、無形文化遺産の
保護に関する条約(2003 パ)、文化的表現の
多様性の保護と促進に関する条約 (2005
パ)。

コロカ、アサンミッポウタリ ルブネクル ネ ワ
オカ ラポク タ、言語 7000 オロ タ エムコホ
パクノ イサム ナンコロ セコロ アイエ。

タネ、学校 オロ タ ネヤ サイバースペース
オロ タ ネヤ、ネ 言語 エムコ-エ-エムコ タク
プ アイエ ワ アン ラポク、インネ 言語 フム
ネ フムネ パテク アイエ ルウエ ネ。

アピシキ エアイカプ パクノ ポロンノ アン 言
語 アニ インネ ウタラ ウサトイネノ ウコイソ
イタク パ コロ オカ ヒケ、教育 ネヤ 通信
ネヤ 出版 ネヤ、オロ タ アナクネ ソモ アイ
エノ アハイタ ワ アン 言語 カ ポロンノ ア
ン ルウエ ネ。

ウネノ アン 言語 アニ ウコイソイタク ウタラ
アナクネ、コロ イタク ピリカノ アエパカシヌ
パ ワ エラムオカ クニ アエサンニヨ ヤク ピ
リカ。

ある言葉を使う人が少なければ、それで損を
することがあります。

その言葉を使う人たちがもつと多くなるように
私たちが手助けするならば、それによってその
人たちに得をさせもして、私たちは一緒に得を
しもするでしょうから、そうした結果、ひどい貧
乏人はいなくなるでしょう。

また、初等教育を世界中に広げるために、字
の読み書きは重要なもので、言葉によっていろ
んなことを私たちは教えるべきなのです。

HIV/エイズ、マラリア、いろいろな病気をしてい
る人を治すために、その人たちの言葉を使わ
なければいけません。

自然環境を大事にするために、いろんな土地
にいる人々や先住民たちの考えを参考にすると
よいです。だから、彼らの言葉も大事にする
べきなのです。

私たちの言葉がたくさんあるならば文化もたく
さんあるということは、書類に書かれています。

『文化の多様性に関するユネスコ世界宣言と
その行動指針』(2001年)、『無形文化遺産の保
護に関する条約』(2003年)、『文化的表現の多
様性の保護と促進に関する条約』(2005年)。

しかし、私たちの子孫たちが大人になった頃、
7000 の言語のうち半分ほどが無くなるだろうと
言われています。

現在、学校やサイバースペースでは、その言
語の四分の一しか言われていない一方、多く
の言語はときどきだけ言われます。

数え切れないほど多くの言語で多くの人々が
それぞれ会話しているのに、教育とか通信と
か出版とかの中では言われずにないがしろに
されている言語もたくさんあります。

同じ言葉で会話する人たちに関しては、その
言葉をきちんと教えて(彼らが)理解するように
算段するといいです。

オラ、ネ モシリ オロ タ ネヤ 世界 オロ タ
ネヤ、アニ ナ インネ ウタラ イエ 言語 ネ
ヤッカ エラムオカ クニ アエコオロスツケ ヤ
ク ピリカ ワ。

オラ、エイカウン 言語 アニ ウコイソイタク
ウタラ アナクネ、ネ モシリ オロ タ ネヤ 世
界 オロ タ ネヤ、オヤ ウタラ コロ 言語 シ
ネブ ヘネ トupp ヘネ エラムオカ クニ アエ
コオロスツケ ヤク ピリカ ワ。

インネ ウタラ オヤ 言語 ネ ヤッカ ピリカノ
エラムオカ ヤク エアシリ、コロ イタク 世界
オロ タ マカナク アン ペ ネ ヤ カ エラムオ
カ ナンコロ。

タ タ オロ タ、チュタリ ユネスコ アナクネ、
政府 オルン ウタラ、国連 オロ ウン 機関、
市民社会 オロ ウン 組織、教育機関、専門
家団体、オラ オヤ ウタラ エウン、言語 オピ
ッタ アエヤム クニ トウラノ アリキキアン ロ
セコロ チイエ クス ネ。

ネ ヒ タ、エチャンチャンケ ノイネ アン 言語
アナク、イヨッタ ピリカノ アエヤム ワ アピラ
サ クニ イキアン クニ プ ネ ルウエ ネ。

学校 オロ タ ネヤ サイバースペース オロ
タ ネヤ ネノ イキアン カ キ、言語 ソモ エ
チャンチャンケ クニ イキアン カ キ、言語
アニ 社会 オロ ウン ウタラ ウコケウトウムコ
ロ クニ イキアン カ キ、経済 オロ タ ネヤ
先住民 オロ タ ネヤ 創作 オロ タ ネヤ、言
語 アニ マカナク アエピリカ ヤ カ ヤイコシ
ラムスイパアン カ キ ナンコロ。

ネウン ネ ヤッカ、ネイ タ ネ ヤッカ、エネ
言語 アエヤム クニ プ ネ ヒ アイエパカシヌ
ヤク ピリカ。

2008 パ 2 チュブ 21 ト アナクネ、第 9 回国
際母語の日 セコロ アレコレ ワ アン ルウエ
ネ。ネトワ ネ ヤク ポ ヘネ ピリカ ワ、テ
ワノ 言語 オピッタ アピラサ クニ イキアン
ヤク ピリカ ルウエ ネ ナ。

アウタリ オピッタ エネ イラウエアン ヒ; 国
家的、地域的、国際的段階 オロ タ、言語
ウサトイネノ アイエ パ カ キ、アヌイパ カ
キ ヤク ピリカ。

教育、行政、立法制度 オロ タ ネヤ、文
化的表現 アニ ウコイソイタカン ヒ タ ネヤ、
サイバースペース オロ タ ネヤ ウイマン
ヒ タ ネヤ、ウサ オカ 言語 アエイワンケ

そして、その国や世界中で、もつと多くの人た
ちが話す言語も理解するように勧めるといいで
すよ。

また、優勢である言語で会話する人たちに
関しては、その国や世界中で、別の人たちの持
つ言語を一つでも二つでも理解するように勧める
といいですよ。

多くの人たちが別の言語でもきちんと理解する
ならば初めて、彼らの持つ言葉が世界の中で
どのようにあるものかがわかるでしょう。

さあそこで、私たちユネスコは、政府の人た
ち、国連の機関、市民社会の組織、教育機
関、専門家団体、その他の人たちへ、人が言
語全てを大切にするように、共に働きましよう
と 言うつもりです。

その際、消え去りそうである言語は、一番き
ちんと大切に広めるようにしなければなりま
せん。

私たちは、学校でもサイバースペースでもその
ようにしたり、言語が消えないようにしたり、言
語によって社会の人たちが心を同じくするよ
うにしたり、経済や先住民や創作において、言
語で私たちがどのように幸せになるのかを考
えたりもするでしょう。

どのようにしても、どこであっても、言語が大事
なものであるということが人に教えられるとい
いです。

2008 年 2 月 21 日は、第 9 回国際母語の日と
名づけられています。この日からであればなお
いっそう結構なことで、これから言語全てを
広めるようにするといいですよ。

私たちみんなは以下のように願います。地域
的、地域的、国際的段階の中で、言語がそれ
ぞれ異なって言われたり書かれたりするとい
いです。

教育・行政・立法制度の中とか、文化的表現で
会話するときとか、サイバースペースとか交
易するときとか、いろいろな言語が使われる
とい、と私たちは願うのです。][*註]

ヤク ピリカ、セコロ イラウエアン ルウェ ネ。

"

アイヌイタク ネ ヤッカ アエヤム クニ プ ネ
クス、アイヌタイムズ カ タ ウサ オカ ウタラ
アイヌイタク アニ ウサ オルシペ ヌイパ ヤク
ピリカ クニ クラム。

アイヌ語だって大切にすべきものなので、アイヌタイムズ紙上でいろんな人達がアイヌ語でいろんな話を書けばいいと私は思います。

[*註]: ここに記した原稿のユネスコ事務局長の談話の部分は、一字一句訳するのが非常に難しく、かなり頭をひねってアイヌ語的に言い換えたり省略したりして、一番最初の原文からかなり変わったものとなっています。

ここに記した記事は、一字一句訳するのが非常に難しく、上の日本語は、一番最初の原文からかなり頭をひねってアイヌ語的に言い換えたり省略したりしたものです。参考のため、その原文も以下に記します。

日本エスペラント学会で日本語に翻訳したものです。

<http://www.jei.or.jp/unesko/unesko200711.htm>

(2008 年国際言語年についてのユネスコ談話)

2007 年 5 月 16 日に、国際連合第 61 回総会で、国連総会は、多様性の中の統一、世界的な相互理解を推進するために、2008 年を国際言語年としました。

2007 年 11 月に、ユネスコ事務局長・松浦晃一郎氏は、2008 年の国際言語年を祝し、次のような談話がありました:

ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)は、本言語年にあたりその活動を調整する役割を担い、先導者としての役割を果たすつもりです。ユネスコは、人類がこの先数十年にわたって直面せざるを得ない数多くの課題に対して、言語が決定的に重要だということを深く認識しています。事実、諸言語は人々の集団や個人のアイデンティティ(自己同一性)と平和共存にかかせません。諸言語は、世界と地域とが調和を保ちつつ持続的発展をとげるための戦略的な要因をなしています。諸言語は「万人のための教育」で掲げられている 6 項目の目標(*1)と、国際連合が 2000 年に採択した「ミレニアム開発目標」(以下、「ミレ目標」と略す)(*2)を達成するために最大限に重要です。諸言語は社会の統合の要因として、極度の貧困と飢餓を撲滅する(ミレ目標 1)ためには戦略的な重要性を持ち、また普遍的な初等教育を達成する(ミレ目標 2)ためには識字、学習と生活力を身に付ける上での柱となります。HIV/エイズ、マラリア、その他の病気のまんえんと闘う(ミレ目標 6)ためには、直面している人たちが使う言語によることが必須です。そして自然環境の持続可能性を確保する(ミレ目標 7)ために、現地のそして先住民の知恵と知識とを保護することは現地と先住民の言語に密接に結びついています。さらに、文化の多様性が言語の多様性と密接に結びついていることは、文化の多様性に関するユネスコ世界宣言(*3)とその行動指針(2001 年)、無形文化遺産の保護に関する条約(*4)(2003 年)、文化的表現の多様性の保護と促進に関する条約(2005 年)に示されている通りです。しかしながら、今後数世代の間には、世界で話されている七千の言語の内の 50%が消滅するかもしれません。

現在学校やサイバースペースでは、その内四分の一に満たない言語しか使われていず、多くの言語は散発的に使われるにすぎません。何千もの言語が、日常のコミュニケーション手段として人々の集団で使われているにもかかわらず、教育体系、通信手段、出版業やいわゆる公的な場面から疎外されています。

われわれには緊急な行動が必要ですが、いかにすべきでしょうか。

それぞれの言語コミュニティに対しては、第一言語ないし母語を、教育も含めてなるべく広範にまた頻繁に使うような言語政策を立て、国民的または地域的、そして国際的に使われる言語の

習熟と併行させるよう奨励します。また、優位な言語を話す人たちにも、他の国民的、地域的言語、さらに一つか二つの国際的な言語に習熟することを奨励します。複数言語主義が完全に根付いてこそ、全ての言語がグローバル化した世界の中に自らを位置付けることができます。そこでユネスコは各国政府、国際連合の諸機関、市民社会の諸組織、教育機関、専門家団体、そのほかの全ての関係者に対して、個人的、集団的な諸場面において、全ての言語、特に絶滅に瀕している言語に対する尊敬、促進と保護とを増進させる取り組みをされるよう要請します。教育面、サイバースペース面、教養面での取り組みによって、絶滅に瀕している言語の保全事業によって、社会の融合のための道具に言語を使おうとすることによって、言語と経済の関係、言語と先住民の知識の関係、言語と創作の関係などを探求することによってか、以上いずれの手段によっても「言語は重要だ」という考えがあらゆるところに広報されることが必要です。この意味で2008年の2月21日が第9回の国際母語の日(*5)にあたることは重要な意義をもち、諸言語の発展をはかる方策を導入するのに適した期限といえます。われわれの共通の目的は、国家的、地域的、国際的な段階において、言語の多様性と複数言語主義の重要性が教育・行政・立法制度の中で、文化的な表現とコミュニケーション手段の上で、そしてサイバースペース上や商業上も認められることです。

(以下は前と同文)。

アイヌタイムズをご購入していただける方がお知り合いでいらっしゃいましたら、お声をかけていただけると大変うれしく思います。

購読連絡先: 〒055-0101 北海道平取町二風谷 80-25 萱野志朗(宛)

購読料: 1500 円 (4号ごと/アイヌ語版のみ)

2300 円(4号ごと/アイヌ語版と日本語版)

読者からの投稿募集:

(連絡先): 〒047-0033

浜田隆史(宛)

北海道小樽市富岡 1-32-136

電子メール: otarunay@yahoo.co.jp

ウェブページ: <https://otarunay.at-ninja.jp/taimuzu.html>

注)アイヌタイムズの著作権は、アイヌ語ペンクラブにあります。

注)1. 赤字は、アイヌ語です。

2. 赤字のイタリック文字は、主に日本語由来のアイヌ語外来語です。